

県営ほ場整備事業浅羽地区内工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書（1987年度分）

十二所遺跡

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

序 文

浅羽町では1975年（昭和50年）以来、農地を大規模農業に適した形態に改良し、生産性の向上をめざして、水田地帯を中心に圃場整備事業が行なわれてきた。が、この事業の進展と相呼応して、用水路は地下に埋設されたパイプラインとなり、コックを捻れば灌漑用水が供給できるシステムが導入され、水田地帯の景観はすっかり変わって、い、大型米作農業へと進む農業後継者の内には単に機械化を図るのみでなく、コンピューターまで導入した稲作を開始する者もあらわれ、農業の近代化、活力化が強力に推進されてきている。

しかし、その反面、この大規模な整備事業に伴って、民俗的資料や歴史的資料が消滅の危機にさらされることとなり、一部有識者の間では憂慮の声があがって居ることも事実である。

このため、町としては民俗文化財収蔵庫を仮設し、古い農具や生活用具の保存につとめたほか、水田の下に埋没保存されていた原始・古代・中世などの埋蔵文化財は、記録保存の方法を採り、出来る限りの正確な記録として保存すべく努力してきた。

1982年（昭和57年）から1987年にかけては、東地区で、西立・馬場・宮西・権現山遺跡などの発掘調査を行い、報告書を刊行した。

今回調査した十二所遺跡の調査は、一連の圃場整備事業に関する調査としては最後のものであり、1987年5月から1988年1月まで行ったものである。

これら一連の調査により、人が住み始めてから、せいぜい数百年の歴史しか無いであろうと信じられていた当地区が、実は数千年以前にさかのぼって人々の生活が開始されていたという明白な証拠を見せられ、郷土の歴史に対する認識を一変させられることとなった。また、町民の文化に対する意識や理解も高まったものと信じている。

こうした成果は、開発に対し、文化財の保存という困難な命題を持つ我々に対して、闇黒の中にあった郷土の真実の姿を引き出させる強い力を与えると共に、今後、何をなすべきかについて示唆を与え、励ましとなった。

文末になったが、圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査を最初から手がけられ、献身的に御努力いただいた柴田稔氏を筆頭に、調査に関連して格別の御協力を賜った中道農林事務所、浅羽町土地改良区をはじめとした関係諸機関に対し、心より感謝の意を表して御筆。

静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

教育長 岡 本 幸 夫

凡 例

1. 本書は、泉宮ほ場整備事業浅羽工区の1987年度工事箇所の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査費用は、中速農林事務所が総額の72.5%を負担し、残りの27.5%が国・県の補助金である。
3. 現地の調査は1987年5月1日から1988年1月31日まで行い、整理・報告書作成作業は、1988年度に行った。
4. 調査は、静岡県教育委員会文化課の指導の下で、浅羽町教育委員会が行ったが、調査体制は下記のようなものである。

調査主体者 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会教育長 鈴木 豊（1988年 9月30日まで）

岡本幸夫（1988年10月1日から）

調査担当者 柴田 稔

調査補助員 柴田真由美

事務局 浅羽町教育委員会 担当 原 利秋

作業員 荒井克巳 久保田正 戸塚俊磨 久保田米子 近藤美枝 西尾勝美 鈴木喜代江
久保田久子 平野あや 金原尚雄 武田光子 岡本慎一 鈴木繁美 三輪一男
鈴木武治 柴田あや子 中村龍也 岡本春子 原 すが 西尾義男 堀美広高

5. 資料の整理・本書の執筆は柴田稔が行ったが、遺物の水洗い・注記・復元は岡本春子が担当し、遺物の実測は柴田真由美の協力を得た。

目 次

I 調 査 の 経 過	1
II 周 辺 の 環 境	4
III 弥生時代の遺構・遺物	6
IV 古墳から奈良時代の遺構・遺物	10
V 平安から鎌倉時代の遺構・遺物	19
ま と め	29

挿 図 目 次

第 1 図	調査地点周辺地形図と調査区配置図	3
第 2 図	周辺の遺跡と遺跡位置図	5
第 3 図	C水路調査区断面図(部分).....	6
第 4 図	C水路調査区山土弥生土器実測図	8
第 5 図	C水路調査区出土弥生土器実測図	9
第 6 図	3号溝状遺構実測図	11
第 7 図	3号溝状遺構断面図	12
第 8 図	3号溝状遺構出土遺物ドットマップ	13
第 9 図	3号溝状遺構出土遺物ドットマップ	14
第 10 図	3号溝状遺構山土須恵器実測図	16
第 11 図	H1・4・5区出土須恵器実測図	17
第 12 図	H1・4・5区出土須恵器実測図	18
第 13 図	3号溝状遺構出土土師器実測図	18
第 14 図	B水路調査区・H1・3～5区鎌倉時代遺構配置図	21
第 15 図	2・3号井戸状遺構実測図	23
第 16 図	H3区付近実測図	24
第 17 図	各調査区出土陶器類実測図	26
第 18 図	H5区出土土鉢実測図	27

図 版 目 次

- 図版 1 上 遺跡遠景
下 C水路調査区E 91付近遺物出土状況
- 図版 2 上 C水路調査区E 69付近遺物出土状況
下 C水路調査区E 64付近断面
- 図版 3 上 H 5区3号溝状遺構完掘状況
下 H 5区3号溝状遺構遺物出土状況(中層最下部)
- 図版 4 上 H 5区3号溝状遺構遺物出土状況(中層最下部)
下 H 5区3号溝状遺構遺物出土状況(中層)
- 図版 5 上 H 1区3号溝状遺構遺物出土状況
下 H 1区3号溝状遺構遺物出土状況
- 図版 6 上 H 1区3号溝状遺構と小穴群
下 H 5区鎌倉時代遺構群
- 図版 7 上 H 5区鎌倉時代遺構群(部分・南西側)
下 H 5区鎌倉時代遺構群(部分・北西側)
- 図版 8 上 1号井戸状遺構完掘状況
下 2号井戸状遺構遺物出土状況
- 図版 9 上 3号井戸状遺構遺物出土状況
下 B水路調査区E 92付近断面
- 図版 10 各地点出土弥生土器
- 図版 11 各地点出土弥生土器
- 図版 12 各地点出土須恵器
- 図版 13 各地点出土須恵器
- 図版 14 各地点出土須恵器・土師器
- 図版 15 各地点出土土師器・陶器
- 図版 16 各地点出土陶器
- 図版 17 各地点出土陶器・土甕

I 調査の経過

調査に至る経過

本遺跡は、浅羽町諾井字十二所487番地から出土した弥生土器を、1958年1月28日に当時の浅羽中学校教諭の柴田静夫氏（現浅羽町文化財審議会会長）の下へ、児童が届け出た事が発見の端緒となっている。

この遺跡は、その後1965年刊行の静岡県遺跡地名表にも掲載され、周知の遺跡として扱われていたが、地図への誤転写から、現在の位置から南西方向約0.5kmの低地帯に位置が記入されていた。この点を修正するために、1985年に柴田稔が踏査すると共に遺物発見地番の確認を行った。

本遺跡は、以上のように明らかに周知の遺跡であったが、1987年度に県営は場整備事業浅羽工区の最後の面工事として、一部が破壊される計画となった。

このため、1986年12月15日から12月23日までの期間に浅羽町単独事業として、は場整備用地内の遺跡確認調査を行った。この調査は、グリット15箇所、トレンチ1箇所という小規模なものであったが、おおむねの遺跡の範囲は確認された。

確認調査の結果に基づき、町教育委員会は、中遠農林事務所、浅羽土地改良区などと協議を重ねた。

工事は散在する島畑を一箇所に集める畑寄せ工事、用排水路の新設、畦畔の移動、農道の移動新設整備などであった。

浅羽町の水田地帯の場合、土地が平坦であることと、すでに稲作に適した土壌が育成されていることから客土などの土壌改良は行われないため、現在の水田面に対してはほとんど工事の手は加えられない。このため、畦畔の移動は調査の対象から除外した。また、農道の工事は、路面舗装をしないという前提で調査から除外し、最終的には島畑を削除する部分と排水路分だけが調査の対象となった。

調査は、遺跡が事実上農地の下に保存されるという点から、調査の深さをある程度限定した。排水路分は、原則として現水面下1mまでとし、遺構がある場合、遺物が集中する場合に限って可能な限り深く掘ることとした。畑寄せは、耕作による影響を受ける可能性のない深さが、現水田面下約30cmであるため、余裕をみて現水田面下50cmまでを調査の対象とした。遺構・遺物に対しては水路分と同様の扱いとした。

埋め戻しは、水路分に関しては、深さ1mまでを調査側、畑寄せ分に関しては深さ0.5mまでを調査側が担当し、それより上は工事側で担当することとした。したがって、3号溝状遺構のように深い遺構は、水田面下に保存されている。

調査の経過

調査は、2 次に分けて行った。

第1次調査は1987年5月1日から8月25日までである。また、第2次調査は1987年8月26日から1988年1月31日までである。このうち、前者は7月24日までが中遠農林事務所負担分であり、7月25日から8月25日までが岡・県の補助分である。また、後者は、10月31日までが中遠農林事務所負担分であり、11月1日から翌年1月31日までが国・県の負担分である。

第1次調査は、B・C水路分と、B水路分以南のH3～5区であり、第2次調査は、H1・2区とH3～5区の残余の分である。

調査の方法

調査区は、除去される島畑をH1～5区とし、水路分は幅1.4mのトレンチ状であるが、B・C調査区とした。なお、A水路分の調査区は、遺跡の範囲外であることが確認されたので調査の範囲から除外した。

調査上のポイントは、B水路調査区とH1～5区は共通しているが、C水路調査区とは一致しない。ただ、両者共に盤田用水浅羽幹線の側道から数えて西に2本目の工事前の農道と水田との境をNOEOとしている。このポイントから北へ進めばN1～nと1mごとに数字が増加し、東に進めばE1～nと同様に増加するようにした。S、Wも同様であるが、実際にはW表示のある箇所はB調査区西端だけであり、S表示は、H3～5区の南端だけである。この基準の設定の状況は第14図を見れば理解できるように成っている。

使用した水準は、県道袋井大須賀線の水準点から移動したものであるが、ほ場整備に用いたものとは異なっているため、両者の間に標高値の差がある。

現地の実測図面は、遺構に関しては原則的には1:20とし、部分的に1:10を作成した。B・C水路分の断面図は1:20で全域の片面を作成したが、報告書では部分のみを掲載した。



第1図 調査地点周辺地形図と調査区配置図

II 周辺の環境

本遺跡は浅羽町誌井字十二所に所在する。この付近は第1図および第2図で理解できるように、原野谷川の自然堤防が発達している。この自然堤防は、現在では島畑の状況を呈しているが、その島畑の数も近年では極端に減少している。また、今回の調査で島畑自体の成立も各時代にわたっていることが確認された。

さて、この十二所遺跡が所在する諸井地区の歴史的・自然的環境を記してみる。

原野谷川は、袋井市石野付近から小笠山塊の北麓に添って西に流れているが、袋井市高尾付近で大きく流れを変えて小笠山塊西端をかすめて南流するようになる。この川は、浅羽町中付近で太田川と合流するが、16世紀以前は太田川とは別個の河川として遠州灘に注いでいた。

諸井地区は、ちょうど原野谷川が小笠山塊の西端をかすめる付近に当たる。したがって、諸井地区は、東半分が小笠山塊の台地高位面の先端部であり、西半分は原野谷川の氾濫原である。

現在の集落は、自然堤防上に立地し、南北に長い密集を見せているが、この状況は近世以降に成立したのであろうことを今回の調査が証明している。

この地区および類似した景観を持つ浅羽地区には、おびたしい数の遺跡が所在している。これらは、近年の開発によって消滅したり、新たに発見されたりしているが、今後さらに増加する見込みである。また、遺跡の範囲はきわめて便宜的であり、中世を含めて考えると地区全体が遺跡であるという極端な表現さえも可能な状況である。

これらの内、谷坂(1)・北山(2)・北原(3)・王子(5)・貫名地(7)・古新田(8)遺跡、谷坂・北山・王子・貫名地古墳などが調査されている。北山・王子遺跡は、周溝墓を主体とした遺跡であるが、とくに北山遺跡は注目される。当遺跡は弥生時代中期末葉ころの周溝墓6基から構成されているが、1号墓は菅玉262個を出土している。また、北山古墳は、4基が調査されたが、いずれも横穴式木芯粘土室を埋葬施設としたもので注目できる。貫名地古墳は1966年に調査されたが、報告書は刊行されていない。この古墳は一部丹塗りの横穴式石室を持ち、金銅装の大刀を副葬した有力な古墳である。

近世以降の諸井地区には、強力な水利権が所在した。その発生は地図上でも容易に指摘できるように、原野谷川と小笠山塊とに挟まれた浅羽平野の北端に当たり、水の供給の要であったという地理的条件によるものであろう。この水利権が中世にさかのぼりうることは「青木遺跡」の報告書で指摘した。したがって諸井地区の遺跡を見る場合、こうした水利権との関連を忘れて考える訳には行かない。

水利権の様子は、江戸時代の浅羽井組の発展した諸井用水組合の状況から推察される。諸井用水組合では、組合の最高権力を持つ「担当者」を選出する権利を諸井地区に与えている。この権利は、諸井地区に限って負担金が免除されるという特権につながっていたが、担当者個人には、

用水管理の決定権という強力な権力が与えられていた。

諸井用水組合の場合には、担当人は地区から選出されているが、その前身である浅羽井組の場合には、特定の家で世襲された権力であった可能性が高い。

諸井地区の西尾家（西尾勝彦氏）には「せぎど」という屋号があり、この家の東隣に用水が流れていた。「せぎど」は「堰戸」と書き、堰をする所あるいは堰をする所の人と理解できよう。西尾家は江戸時代の名家であるが、水利権と強い関連があるという前提から、担当人を世襲していた可能性は高い。

実は、こうした水利権に関する権力は、現在では形骸化しているとはいえ、江之端排水組合の担当人は梅山地区（旧梅田村）にその選出の権利が与えられ、江川排水の樋門の担当人は福田町大鶴地区で選出しているように、浅羽平野の各所でみることが出来る。また、これらが現在も行われている点はさらに興味深い。（諸井用水組合は、磐田用水組合に発展解消した。）

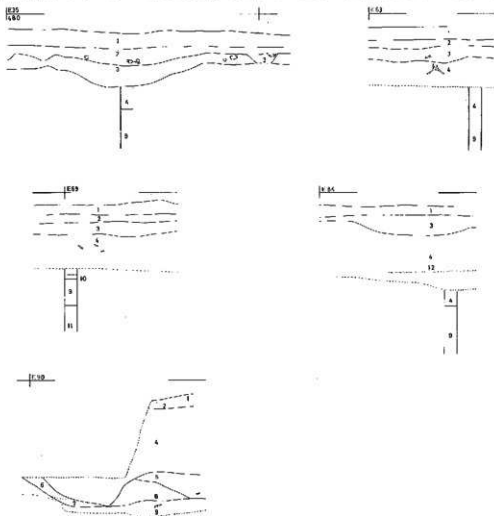
このような水利権が古墳時代、弥生時代へとさかのぼって考え得るかは今後の課題であるが、水利権を取り巻く歴史の具体像が、文献の上だけでなく遺跡からも捉えられる可能性を持っていることは注目したい。



第2図 周辺の遺跡と遺跡位置図 1 : 25,000 (国土地理院 N1-53-2-4-2 使用)

Ⅲ 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代から古墳時代前期にかけての堆積は、第3図に示した4層および9層の上部であり、
厚い堆積を示している。この層は遺跡全体に分布しているが、C水路調査区以外では極稀に遺物



土層名

1. 灰褐色土（耕作土） 2. 黄灰色粘土（床土） 3. 暗灰色粘土（平安・鎌倉時代包含層） 4. 黄褐色粘土（弥生・古墳時代前期包含層） 5. 褐色粘土（少量の炭化物を含む。弥生時代包含層） 6. 褐色粘土（多量の炭化物を含む。弥生時代包含層） 7. 暗青灰色粘土（多量の炭化物を含む。弥生時代包含層） 8. 褐青灰色粘土（弥生時代包含層） 9. 淡暗青灰色粘土（上部は弥生時代包含層） 10. 黒褐色粘土 11. 青灰色粘土 12. 炭化物の薄層 ※ 数字は層序を示していない。

第3図 C水路調査区断面図（部分）

を検出する程度であった。

遺 構

B水路調査区およびH1～5区では、第7図の18層、第16図の7層などが本来は弥生時代から古墳前代前期の包含層であるが、これらには極少量の土器が含まれていたに過ぎない。また、3号溝状遺構の古墳時代前期に対応する層からも遺物はほとんど採集できなかった。このことは、これらの地区は遺跡の外郭に当たるとみて良いであろう。

C水路調査区では、E64・E69・E85・E91付近に遺構の可能性を指摘できる部分があった。しかし、調査の性格上、遺構を充分把握することはできなかった。

次に、これらの4箇所の概要を記す。

＜E64付近＞ 暗褐色粘土層を除去すると、突然弥生時代後期の高坏が発見された。周辺はほとんど遺物を伴わない他の箇所と同様の黄褐色粘土層で、遺構の存在は全く確認できなかった。

＜E69付近＞ 調査区を横断するように幅約1mの範囲に土器の密集がみられた。この土器は、菊川式の新しい段階のものだけであり、完形品も含まれていた。しかし、土層はE64付近と同様で、何らかの遺構が存在したのであろうが、確認できなかった。

＜E85付近＞ 黄褐色粘土層の中間付近に、厚さ1cm弱の炭化物層が水平に分布していた。この層は約1.5mの幅を持ち、周辺に行くに従って希薄になっている。遺物は全く見られなかったが、住居跡の床面と考えるのが妥当であろう。

＜E91付近＞ 確認調査のグリットと重なったことと、調査区壁面が崩壊したことから土層を充分に観察できなかったが、窪地あるいは溝状遺構の一部と思われる堆積をしていた。

完形品を含めて多量の土器が出土した。

遺 物

出土遺物は全て土器であるが、E69・91付近を中心にして少なくない量が出土している。しかし、黄褐色粘土層出土の土器は概して酸化が進み、保存状況は極めて悪い。

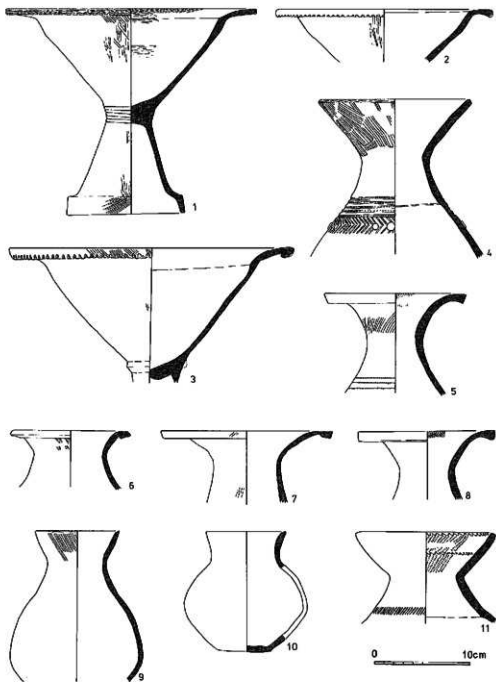
第4・5図はこれらの内比較的保存の良いものの実測図である。

第5図1は、E64付近から出土したもので、第3図の断面図に記したものである。第5図2～6はE69区付近から一括出土したものである。いずれも保存状況が悪く、体部の調整痕などはほとんど観察できない。

第4図は、E91付近から出土したものである。1を除いて体部の調整痕はほとんど観察できないばかりか、5・7・11などは文様も充分に観察できない。

これらの土器は全て弥生時代後期に属するものであろう。

第4図1・2・4～8は二之宮式に属するものであろう。また、3は二之宮式と考えるか、菊川式の古い段階と考えるか意見が分かれるところであろう。

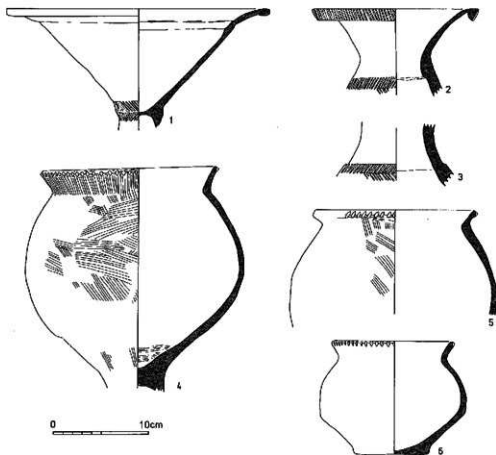


第4图 C水路調査区出土弥生土器実測図

第4図9、第5図1菊川式の古い段階に属するものであろう。

第5図2～6、第4図11は菊川式の新しい段階と考えて良いであろう。

第4図10は、菊川式の古い段階に併行すると考えられるが、本来の菊川式には見られない形式であろう。



第5図 C水路調査区出土弥生土器実測図

Ⅳ 古墳から奈良時代の遺構・遺物

この時期の遺物は、3号溝状遺構から出土している。また、遺構としては3号溝状遺構がある。この溝状遺構は、人工の掘削によって造られたものではなく、自然環境の変化によってできた浅谷であろうが、生活との強い関連が指摘できるので、遺構として扱う。

遺 構

＜3号溝状遺構(D3)＞ H1・H5区から検出した。H1区とH5区との間、幅約13mは未調査区であるが、両者の溝状遺構から同一個体の遺物が検出されたことと、きわめて類似した層位を持つことから、連続する遺構と考えた。

当遺構は、H5区では鎌倉時代の遺構群を調査する段階で、浅い窪地として検出されたが、H1区では完全に埋積していたようである。

溝内最上層は、淡暗褐色粘土(上層)で鎌倉時代の陶器・土師器などを包含し、比較的容易に識別できたが、これより下の層は壁を構成する褐色粘土あるいは黄褐色粘土と類似した淡暗褐色気味の粘土層(中層)であり、識別は困難であった。しかし、7～8世紀代の遺物を多量に出土することから、遺物を遺構調査の目安として掘下げた。このため、各所に掘り過ぎの部分ができたが、N0、N10、N20ラインの3箇所で出土遺物ドットマップを作成することで、溝の状況を確認した。

N0ラインの場合、鎌倉時代には深さ約0.3mの浅い窪地であったが、これより下層をドットマップを作成しつつ掘下げた結果、幅約4.6m、深さ約0.9mで、中央部が一段低い状況で無遺物層(厳密には極少量の土師器を包含しているが、古墳時代前期以前のものである。)と区別された。N10、N20ラインでもほぼ同じ状況であり、中層を除去すると溝状になることが確認できた。

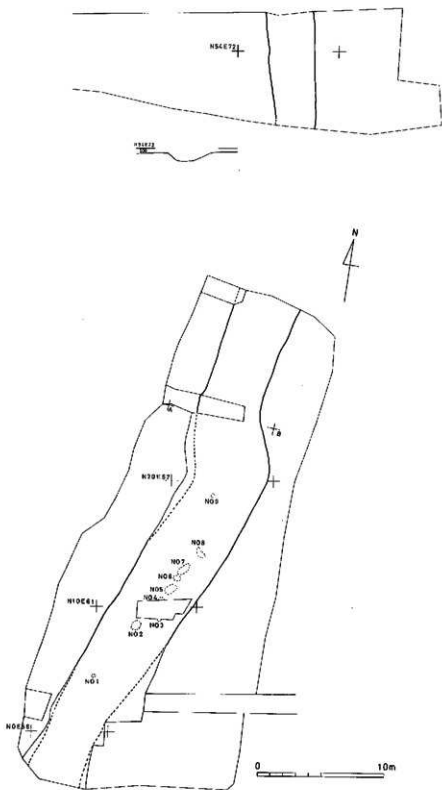
中層からは7世紀前半から8世紀の完形に復元できる須恵器・土師器などが検出されているが、土師器は極度に酸化し、ほとんどが復元不能であった。

中層をさらに掘下げると、淡暗褐色の粘土層や青灰色粘土層、あるいは多量の炭化物を含む層がレンズ状に墳積し、さらに下部では、植物遺体を含むシルト層や、砂層となっている。これらを一括して下層としたが、この状況は、N30ライン付近で一部掘下げて確認したに過ぎないが、自然堤防を分断した約7m前後の浅谷が埋積した状況といえる。

下層の堆積状況は第7図に示してあるが、暗褐色細砂層の下部にあたる標高約2.2m付近から、古墳時代前期(4世紀後半から5世紀前半と思われる)の土器片数点を採集している。

当溝状遺構は、人工の掘削と見るよりは、自然堤防を開析した浅谷と見た方がよいであろう。

第7図に示したように、浅谷の壁は標高3m付近から上は黄褐色あるいは褐色粘土であり、標



第 6 图 3号溝状遺構実測図

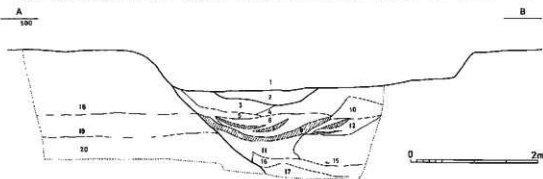
高2.6 m付近以下は、1 mのボーリングステッキで確認できる範囲すべてが、淡暗青灰色の粘土層である。この両者の間は漸移層である。

上記の層は、本遺跡の微高地に広く観察できるものであり、II 1～5区ではほとんど遺物を検出できないが、最上層は古墳時代前期（5世紀前半）の遺物を少量含んでいる。また、C水路調査区では弥生時代の包含層となっている。したがって、当浅谷は、5世紀代でも前半ころに一挙に開析され、ただちに埋積を開始し、7世紀前半以前にはかなりまで埋積し、8世紀にはほとんど埋積してしまっていたことがわかる。

浅谷がかなりまで埋積し、7世紀前半以降の中層が堆積している状況は、土層の変化ではつかみきれないが、ドットマップからある程度知ることができる。

N 0ラインでは、7世紀後半と思われる約200点の須恵器甕の同一個体破片（第10図2の表）だけの分布と、全破片の分布とを作成して見た（第8図）が、全破片からできる垂直分布と、須恵器同一個体の垂直分布とを比較すると、中層の最下部が分離できると共に、明らかに層位的堆積を示していることが見て取れる。

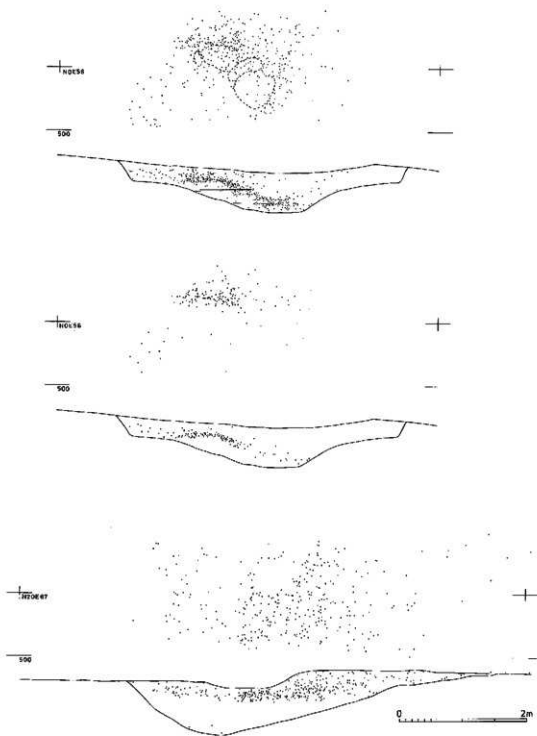
また、N 10ラインでは、全破片の分布と、須恵器だけの垂直分布、土師器だけの垂直分布とを作成して見た（第9図）。これから見ると、土師器だけの垂直分布と全破片の垂直分布は溝状の様子を良く表現しているが、須恵器の垂直分布を見ると、上部に集中し、下部には少ないこと



土層名

1. 暗褐色粘土（多数の7～8世紀の遺物を含む）
 2. 淡暗茶褐色粘土（少量の炭化物を含み、少量の古墳後期の遺物を含む）
 3. 淡暗褐色粘土
 4. 淡暗黄褐色粘土（少量の弥生後期～古墳前期の上器を含む）
 5. 淡暗黄褐色粘土
 6. 青灰色粘土
 - 7～9. 青灰色粘土に炭化物の薄層を含む
 10. 淡黄灰色粘質砂
 11. 暗青灰色シルト（細砂・小石・有機物の薄層を含む）
 12. 暗黄褐色細砂（粘土混じり）
 - 13・14. 炭化物の薄層を含む細砂
 15. 暗黄褐色細砂（少量の古墳前期の土器を含む）
 16. 淡暗青灰色シルト（細砂の部分もある。有機物を含む）
 17. 淡暗青灰色シルト
 18. 黄褐色粘土
 19. 褐色粘土（下部は黄褐色気味。18～20.層の漸移層）
 20. 淡暗青灰色粘土
 21. 暗黄褐色粘土
- ※ 数字は層序を示していない。

第7図 3号溝状遺構断面図



第8図 3号溝状遺構出土遺物ドットマップ
(中段はNOライン間・個体須恵器ドットマップ)

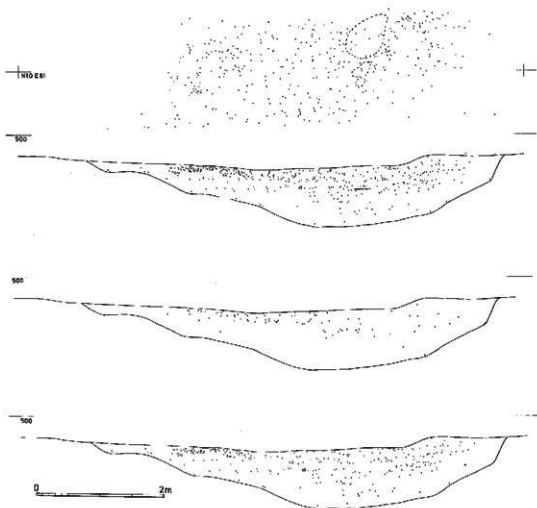
が分かる。この状況は、他のドットマップでも得られるもので、N Oラインの須恵器同一個体のドットマップに見られるものと類似している。

以上のように、中層の最下部が考えられたが、この部分から出土した遺物は、第6図1・2・4・6～9であるが、これは第10図2、第11図9、第13図1・4～6・8である。これらを見ると、中層の最下部は7世紀前半の堆積といえよう。

第8図の同一個体須恵器のドットマップを作成した須恵器が7世紀後半のものであるという前提に立てば、7世紀後半の堆積は西側に片寄って堆積したことになるが、これは、同一個体を抽出したためで、その個体の動きを表現するものであり、溝状遺構の中央部に浅い窪地を残すような堆積であったと見て良いであろう。

8世紀代の遺物は全体に細片が多く、7世紀代のように大型の完形品に近いものは少ない。

なお、N10ラインでの中層出土遺物（土師器+須恵器）に対する須恵器の割合は、約22%



第9図 3号溝状遺構出土遺物ドットマップ
(中段は須恵器のみ、下段は土師器のみ)

である。また、中層を便宜的に一般的な溝内堆積として上部・中部・下部・最下部に分けて、それぞれに全破片に対する須恵器の割合を出すと、26%・16%・16%・10%となり、時期が古い方が須恵器が少ないという傾向もつかめる。

3号溝状遺構は、以上のように埋積浅谷の様子を良く表していることが理解できた。

遺 物

〈須恵器〉 第10～12図が古墳から奈良時代の須恵器であり、第13図が土師器である。

第10図2は、3号溝状遺構の中層最下部から出土したもので、第6図2当たる。頸部から口縁部にかけては横撫で、体部外面は平行叩きの上から掻き目調整が行われている。体部内面は、深い痕跡を残す同心円叩きが施されている。

第11図は、7がII4区出土である以外はすべて3号溝状遺構出土の須恵器である。また、第12図は、すべて3号溝状遺構出土の須恵器である。

第11図2は、体部内面に浅い痕跡の同心円叩きが見られる。

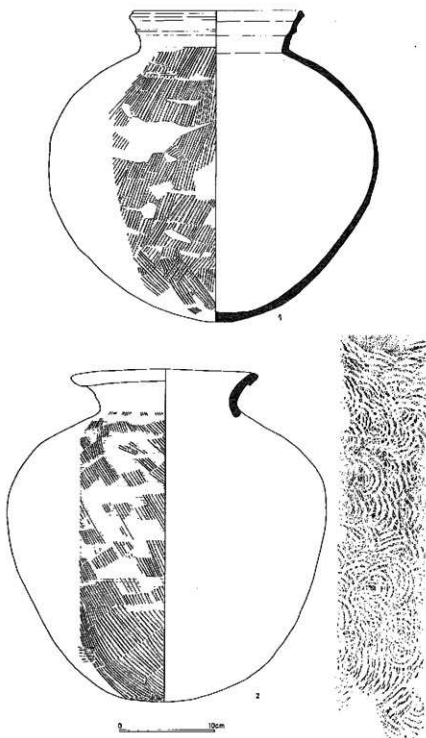
第11図15は、坏身として実測したが、坏蓋の可能性が高い。

出土状況が先にも記したように良好でないため、伴出関係、時期などを明瞭にすることはできないが、第11図9・10は7世紀前半、11～14は7世紀中葉、15～17は7世紀後半、3・4・7は7世紀後半、1・2・8・18・19・第12図は8世紀のものであろう。8世紀の遺物は、資料の性格上細分できないが、8世紀の特定の時期に限定されていることはないようである。

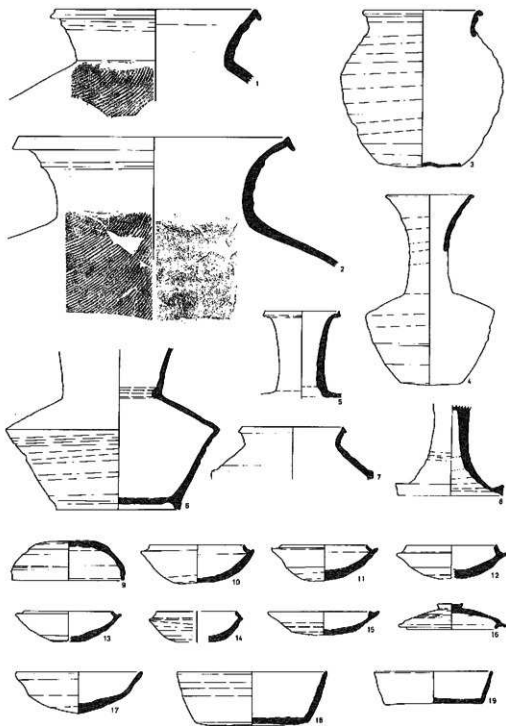
須恵器成形における轆轤の回転方向を記すと、轆轤が時計回りをしているものは、第11図3・4・6・10～13・16～19・第12図1～3・5・7・11・14・15・17であり、逆時計回りのものは第11図5・9・14である。また、鋳削り、鋳切り離し、轆轤成形痕などの内、二つ以上から轆轤の回転方向が観察できたのは第11図3・4・6・16・18・第12図7でありいずれも時計回りである。数少ない資料からではあるが、須恵器成形において同一個体が完成するまで轆轤の回転方向が変わるものは見られなかった。なお、轆轤の回転方向として示したので、鋳削りの方向として見たものとは逆の表現に成っている。また、轆轤の上に置かれた製品の天地は、通例に従った。

〈土師器〉 いずれも3号溝状遺構から出土したものであるが、保存状況は極めて悪く、どうにか形が判る程度である。

第13図1・4～6・8は3号溝状遺構中層最下部、2・3は中層下部、7は中層中部の出土である。

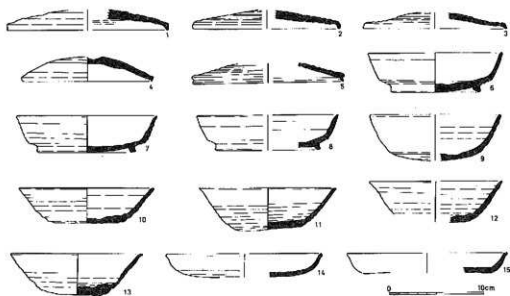


第10圖 3号溝状遺構出土須恵器実測圖

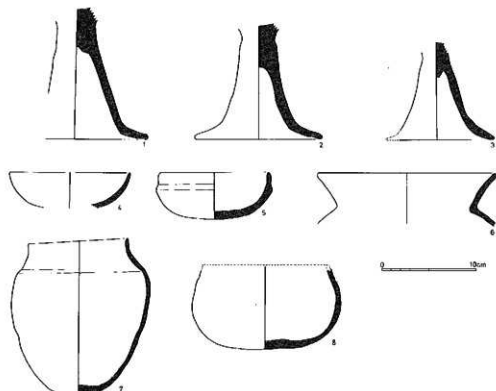


第11图 H1·4·5区出土须惠器实例图

0 10cm



第12图 H1·4·5区出土须惠器实测图



第13图 3号溝状遺構出土土師器实测图

V 平安から鎌倉時代の遺構・遺物

この時期の遺構は、C水路調査区E37付近、B水路調査区EO付近、H1～3・5区などから検出された。また、出土遺物には、陶器・土師器・青磁器・土鍾・少量の木製品・自然遺物などがある。

遺 構

小穴群（第14図）

C水路調査区のS1～E15付近、H1区の東端、H4・5区南半から、合計160個の小穴が検出された。これらは、S1～E15付近（A群）、H4・5区付近（B群）、H1区付近（C群）に大別できる。

＜A群＞ 調査区内から15個検出された。大きいものは径約50cm、深さ約40cm程であり、小さいものは径約20cm、浅いものは深さ約10cm程で大小の差が大きい。柱痕、柱根は検出できなかったが、大半は柱穴と考えて良いであろう。

小穴内、小穴群の周辺からは鎌倉時代以前の遺物が出土しているが、大半は鎌倉時代の後期に属する陶器である。したがって、小穴群の時期は、下限を14世紀と考えて良いであろう。

＜B群＞ E15付近からE49付近の1号溝状遺構の間約35mは、何らの遺構も検出できないが、H4・5区には多量の小穴が見られる。

この小穴群は、1号溝状遺構と2号溝状遺構とに挟まれた範囲にしか検出できない。また、北側は、N20ライン付近を境にして全く検出できなくなる。南側に関しては調査区外に延びているため不明であるが、現状で小穴群は、東西約37m、南北約25mの範囲に分布している。したがって、少なく見てもおよそ1000㎡の範囲に建物が想定できるわけであるが、これはこの地区で旧家といわれている家の宅地に比較すれば下限程度の面積である。

小穴の規模は、A群付近と同様であるが、3号溝状遺構の窪地から検出した小穴2個から柱根が検出された。

140個もの小穴が検出されたにもかかわらず、明確な形で建物を想定できる部分はない。

NOE67付近を中心として南北約6.5m、東西約3mの範囲は、小穴に囲まれているが、小穴の空白部分となる。とくに、E69ライン付近では、2～3列の小穴が並んでいるように見え、きわめて相対的ながら南北約8m、東西約4.5mの建物が想定できる。これは、尺に換算すれば、およそ4.5×2.5間となる。

この他に、NOE62付近、N5E58付近、N13E62付近などに建物らしい配置をもつ小穴群がある。

小穴の時期は、下限を14世紀と考えたいが、のちに示す井戸状遺構を考慮に入れると13世

紀の例もあると考えたい。

この小穴群が検出された範囲に限定されて多量の土鏝が出土した。他の調査区からは1点も発見できなかったことを考え合わせると、この小穴群の性格を検討する資料となり得るかも知れない。

＜C群＞ H1区から8個の小穴が検出された。これらにはA・B群のような人型の小穴は含まれていない。

時期などについては出土遺物が少ないために不明確であるが、14世紀ころと考えている。

溝状遺構

B水路調査区NOE49付近(D1)、H4区(D2)、H5区(D3~5)、H1区(D3)から5条の溝状遺構が検出された。

＜1号溝状遺構(D1)＞ 幅約1m、深さ約0.3mのU字状断面の溝である。内部には暗褐色粘土が堆積していた。

約1.4mの範囲しか調査していないために、性格ははっきりしないが、2号溝状遺構と類似した性格をもっているであろう。

内部からは、第17図26に示した小皿などが出土している。

溝の時期は小皿の時期とすれば、鎌倉時代前期である。

＜2号溝状遺構(D2)＞ 幅約0.8m、深さ約0.3mでU字状の断面をしている。H4区を縦断するように約30mを確認したが、北よりの部分は極めて不鮮明である。

内部の堆積土は酸化が進み、わずかに暗褐色を呈した粘土である。

出土遺物は多くないが、鎌倉時代の陶器が主体である。

＜3号溝状遺構(D3)＞ すでにIV節で記したが、この時期にはわずかな窪地になって残っているに過ぎない。ただ、小穴群がこの窪地の中にまで及んでいるばかりか、C群の中央を縦断している点は注目したい。

＜4号溝状遺構(D4)＞ H5区のN9E60付近から検出した。幅約0.5m、深さ約0.2mでU字状の断面をしている。H5区内で約4.5m確認した。

3号溝状遺構に通じた小溝であろう。

ごく少量の鎌倉時代の陶器を出土している。

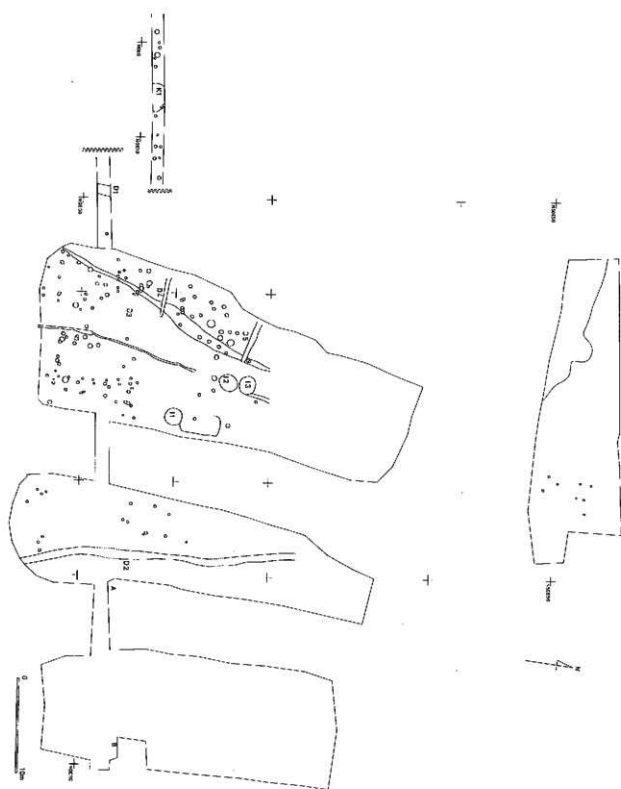
＜5号溝状遺構(D5)＞ N18E65付近から検出した。幅約0.6m、深さ約0.1mで約4.5mを確認した。

4号溝状遺構と類似した性格をもつものであろう。

井戸状遺構

H5区から3基検出された。

＜1号井戸状遺構(I1)＞ N10E73付近から検出した。径約1.9mのほぼ円形の発見面をもち、深さは約1.2mである。底面は、黄褐色粘土層から淡暗褐色粘土層に移行する部



第14図 B水路調査区・H1・3～5区鎌倉時代遺構配置図

分にある。内部堆積は暗褐色有機質粘土である。

発見面の標高は約4.7 mであり、底面の標高は約3.45 mである。

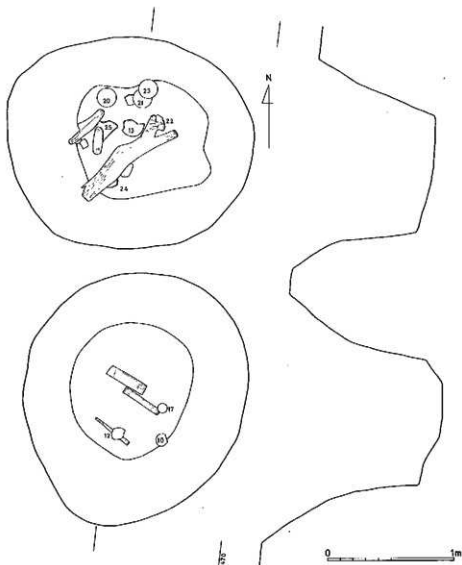
北側に接して、幅約2 m、長さ約4 m、深さ約0.1 mの窪地が見られるが、関連したものかは不明である。

底面遺物は検出されなかったが、第17図9が覆土から出土している。

＜2号井戸状遺構（12）＞ N55E69付近で、3号井戸状遺構に接して発見された。また、3号溝状遺構内に掘り込まれている。

長径約2.0 m、短径約1.8 mのはぼ円形の発見面をもち、深さは約1.3 mである。

発見面の標高は約4.4 m、底面の標高は約3.1 mである。内部堆積は暗褐色有機質粘土である。



第15図 2・3号井戸状遺構実測図（上3号 下2号）

底面からは、板状の木材3点と陶器3点（第17図10・12・17）が検出された。また、覆上からは、桃実と思われる種子などの自然遺物の他、第17図10・12・15・18などが検出された。なお、第17図11は発見面付近から検出したものであり、17は墨書がある。

掘り込まれた部分が3号溝状遺構内のため、底面付近には第7図の8・9層などに対比できる有機物層が見られる。

出土遺物から当遺構の時期は鎌倉時代中期と考えられる。

＜3号井戸状遺構（I3）＞ 2号井戸状遺構に隣接し、形態も類似している。

長径約2.0 m、短径約1.7 mのやや楕円形の発見面をもち、深さは約1.0 mである。発見面の標高は2号井戸状遺構と同様であるが、底面は標高3.35 mとやや高い。

底面からは、自然木と伴に陶器が出土しているが、20・21・23のように完形あるいは完形に近いものも含まれ、置かれた可能性が高い。

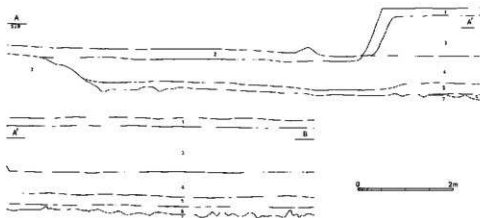
内部からは、第17図13・14・19～25などの陶器類の他に、瓜科の植物種子や常滑焼の細片が出土している。また、第13図19は、比較的底面に近い位置から出土しているが、底面出土遺物よりは高い位置から出土している。

出土遺物かの2号井戸状遺構と同一時期のものと考えられる。

土坑状遺構

＜1号土坑状遺構（K1）＞ B水路調査区E6付近から検出した。調査の幅が狭いために、溝状遺構の可能性もある。

幅約3 m、深さ約0.3 mで、暗褐色粘土が堆積していた。底面は凹凸が激しく不整形である。



土層名

1. 耕作土・攪乱 2. 水田耕作土 3. 淡褐色粘土 4. 褐色粘土（やや砂質） 5. 褐色粘土（鎌倉時代以前） 6. 暗褐色粘土（平安時代以前） 7. 黄褐色粘土（古墳時代前期以前）

第16図 H3区付近断面図

内部からは奈良時代の遺物も出土したが、第17図5のように鎌倉時代の陶器も少量出土した。

そ の 他

〈B水路調査区H3付近〉 第14図のA-B間の断面図が第16図である。

この断面から見るとE92付近で黄褐色粘土層は急激に約1.1m低下し、標高約3.9mとなる。これより東は徐々に低下し、E108付近で標高約3.7mになる。また、1988年度にE110から東へ約25mの地点でグリット調査を行っているが、この地点では6層下面に対応すると思われる層が標高約3.6mで現れているので、東に向かってこれ以上の傾斜はないと思われる。このわずかに傾斜した部分に暗褐色粘土層（6層）が堆積している。この層からは、平安時代末を下限とした遺物が少量出土している。6層の上には褐色粘土（5層）が堆積し、少量の鎌倉時代の陶器を含んでいる。5層から上は何れも褐色粘土で分層が困難な程であり、この上面は標高5.5mにまで達している。この厚い褐色土の層は、鎌倉時代ないしはそれ以降の堆積ということになるが、表土以外には近世の遺物を含んでいない。

H3区付近の低地の状況は、第1図の心宗院北側の低地に続くものであろうが、幅20m以上にもなり、深さ約2.5mで奈良時代の包含層に達する場所もある。

基本的には浅谷ないしは旧原野谷川流路の一部ということになるが、堆積の状況は極めて平坦であり、水田跡の可能性が高い。

〈C水路調査区E39付近〉 C水路調査区は東端を除いて平安から鎌倉時代の包含層が薄く堆積しているが、E39付近の調査において、平面的には遺構として確認できなかったが、断面に幅約0.5m、深さ約0.15mの溝状の落ち込みが見られ、陶器が出土した。

遺構の性格は不明であるが、出土した陶器は第17図2であり、平安時代に属している。

遺 物

出土遺物の内圧倒的多数はいわゆる山茶碗と呼ばれるものである。その他に、灰釉陶器の系譜に含まれるものや、常滑焼などの中世陶器、青磁器の小片、土甕などが出土している。

〈陶器〉 灰釉陶器の系譜に含まれるもの、いわゆる山茶碗、中世陶器をすべて陶器と総称する。

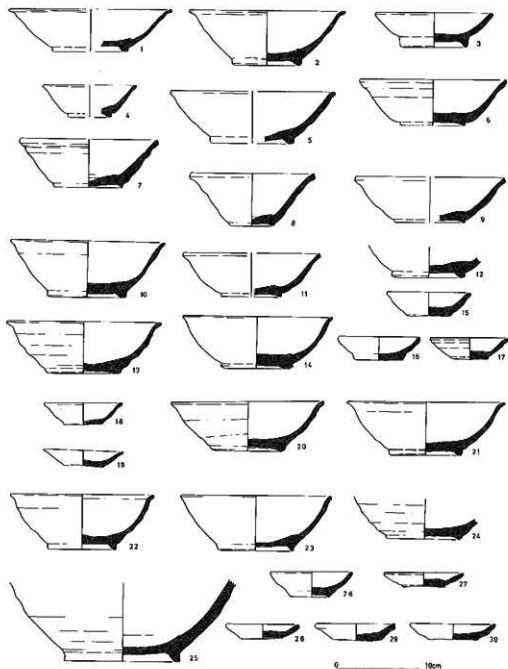
第17図は、各調査区から出土した陶器である。これらの内、遺構出土のものは、2（C水路調査区E39付近）、5（B水路調査区1号土坑状遺構）、9（1号井戸状遺構）、10～12・16～18（2号井戸状遺構）、13・14・19～25（3号井戸状遺構）、26（1号溝状遺構）、である。他の資料は何れも包含層出土であり、1・27はH4区、3・6～8・28～30はH5区、4はC水路調査区である。

1～4は、無釉であるが灰釉陶器の系譜に含めて考えられ、平安時代末ころの製品であろう。

5・26は、鎌倉時代前期の山茶碗・小皿であろう。5には漬け掛けの灰釉が見られる。また、糸切り痕は撫で消されている。

10～24は鎌倉時代中期の山茶碗・小皿であろう。

碗の高台部は、10～12・20～23のように縦長の断面長方形の付け高台のものと、13・14のように横に広く低いものがある。轆轤からの切り離しは糸切りであるが、その痕跡は粗雑ではあるが無で消してある。高台部端部は、14・21・22・24などでは羽般痕が有り



第17図 各調査区出土陶器類実測図

10には粗朶痕が有り、他は粗雑だが撫で消してある。また、13・14の高台部の造りは粗雑さが目立つ。

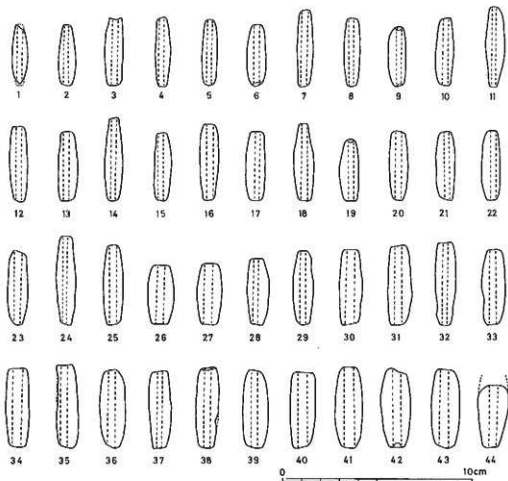
小皿には高台が付かない。体部は内弯気味のもの、と外弯気味のものがある。底部は厚く、小さく造り出しており、糸切り痕が有るもの(18・19)と、撫で消して有るもの(15・17)とがある。

こうした特徴から見ると、前後の2時期に分けられる可能性もある。

6・9・11・27・30は鎌倉時代後期から室町時代初期の製品であろう。

碗は、7・9のように体部が直線的なものと、6・11のように内弯気味のものがある。高台部は断面三角形の付け高台で粗朶痕が顕著である。また、轆轤との切り離しの糸切り痕も顕著に見られる。

小皿は分厚く浅い。底部には糸切り痕が明瞭に見られ、底部の造り出しはほとんどないか、わずかに見られる程度である。



第18図 H5区出土土器実測図

〈土鍾〉 H5区の平安から鎌倉時代の遺構群発見面、およびその上面、小穴内より多量の土鍾が出上した。総数は約130個であるが、表面が剥落するなど保存は良くない。

第18図は、これらの内比較的保存の良いものを選んで図化した。断面はいずれも円形なので省略した。

1～9は重量2g代のものである。1は、約1.5gであるが、欠損分を含めれば2gとなるであろう。10～21は3g代、22～29は4g代、30～34は5g代、34～41は6g代、42～44は9g代のものである。44は実際には7gであるが、欠損部分を復元すれば9g代になるであろう。また、7～8g代の例は見られなかった。

大半が中央部がやや膨らむエンタシス様を呈している。

長さ、太さには差が見られるが、共通性もあるように思われる。長いものは約4.7cmで、短いものは約3.3cmであり、太いものは径約1.7cm、細いものは径約0.8cmである。紐通しの穴は、径0.3～0.5cmである。また、穴の内部の観察できるもののなかには竹の節のような痕跡は見られなかった。

形態に大きな差はないが、26・27が代表するように、太さの割りには短いものと、7・11・14のように細くて長いものがある。これらは重量とは直接関係しないように見えるが、長さは重量と関係なく長くても4cm前後であるため、重いものは太いという傾向はある。

各土鍾の重量は、乾燥した状態で0.5g単位で計ったものを用いたが、十分に水分を含ませて計測して見ると、平均で乾燥時の約1.19倍の重量となった。

なお、一般に中世の土鍾といわれる重量100gを超えるような大型の上鉢は当遺跡からは発見されなかった。

ま と め

調査の結果は以上のである。

この十二所遺跡は、1988年度には国・県の補助を得て範囲確認調査を行った。その結果から見ると、今回調査した地点付近が北限であり、これより南東の方向に広く長く続き、芝地区の高道遺跡へと連続するらしいことがわかった。その意味では今回の調査は極一部に限定されたもので、到底遺跡の全容を知り得るものではなかった。

しかし、古墳時代の溝状遺構や、鎌倉時代の集落跡などは十二所遺跡研究の課題を提供することにはなったと思う。

本遺跡は、周辺の黄褐色粘土層の遺物包含状況から見ると、弥生時代後期初めころは、現在の水田面よりも1 m以上あるいは1.5 m前後低い面に生活面があり、古墳時代前期にかけて急速に堆積していったことがわかる。これは、度々の洪水に原因しているのであろうが、その洪水の原因は、加藤芳朗氏等が指摘するように(1)弥生時代の海水準の上昇にあったのであろう。

こうして、急速に堆積した粘土層を掘り込んでいるのが3号溝状遺構である。

この溝状遺構が人工の掘削か、自然の開析かは、遺構の末端が確認できていない現時点では結論することはできないが、自然の開析によって成立した浅谷と見ることとした。

5世紀前半ころに急速に開析が進み、現水田面下2 mにも達する谷が刻まれたことになるが、それは、ただちに埋積の過程へと移行している。

この所見も加藤氏の所見(2)を立証するものである。

幅約7 m、深さ約2 mの3号溝状遺構は、古名栗川(3)や、幅2.1～2.2 m、深さ約3 mの伊場大溝(4)とは規模において比較できるものではないが、類似した原因で成立したものといえよう。

中世の集落については、浅羽町内では馬場第1・第2遺跡(5)、権現山遺跡(6)などに調査例がある。いずれも浅羽荘と呼ばれていた時代の集落であり、浅羽の代名詞的役割を果たしている浅羽庄司宗信との関連などは注意しなくてはならない。

これまでの調査では、馬場第1遺跡で溝に囲まれた園宅地が想定され、権現山遺跡で住居の散在性が指摘された。しかし、同時に中世の遺跡は広大な範囲に散在し、局部的な調査では容易に全容を理解できる状態にはならないことも理解できた。

今回の調査では、H5区を中心に溝に囲まれた園宅地が調査され、B水路調査区西端では溝に囲まれていない園宅地が調査され、一集落内にも異なった形態の居住空間が存在することを立証できた。

また、H5区での土師の出土状況は、これまでの遺跡でも多数出土しているとはいえ異常な多さであると伴に、本遺跡の他の地点での少なさと比較すると、集落内での生産形態の違いを指摘

できる可能性もでてきた。

上二所遺跡の場合、中世の居館跡と想定される心宗院が内在しており、その意味では、地方豪族と庶民との関連も指摘でき得るわけであり、今回調査された部分を中世の庶民の居住域として理解し、今後の検討の課題としたい。

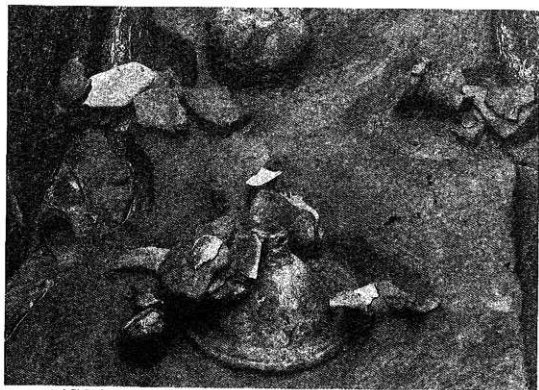
註

1. 加藤芳朗 「伊場遺跡遺構編」 （伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討） 浜松市教育委員会 1977
※ 井関弘太郎 「沖積平野」 東京大学出版会 1983 等もある。
2. 加藤芳朗 「坂尻遺跡」 — 自然科学編 — （坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景） 袋井市教育委員会・静岡県教育委員会・建設省中部地建 1985
※ 原野谷川流域における加藤の最新の研究である。
3. 註2に同じ
4. 註1に同じ
5. 柴田 稔 「青木、馬場第1・第2遺跡」 浅羽町教育委員会 1984
6. 柴田 稔 「権現山遺跡」 浅羽町教育委員会 1987

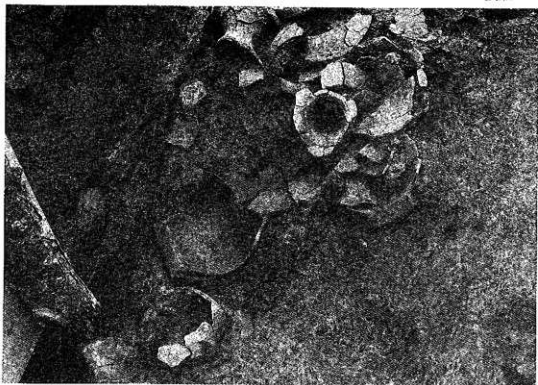
写真図版



道跡遠景



C水路調査区E91付近遺物出土状況



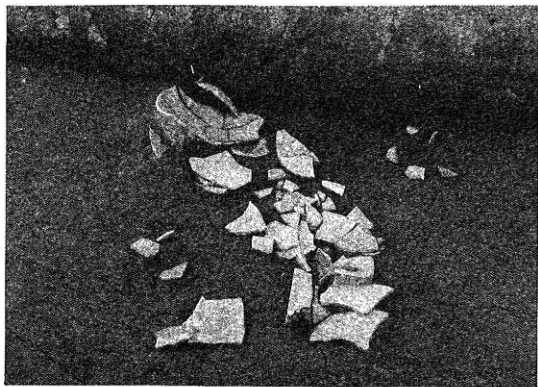
C水路調査区 E 69付近遺物出土状況



C水路調査区 E 64付近断面



H 5 区 3 号溝状遺構完掘状況



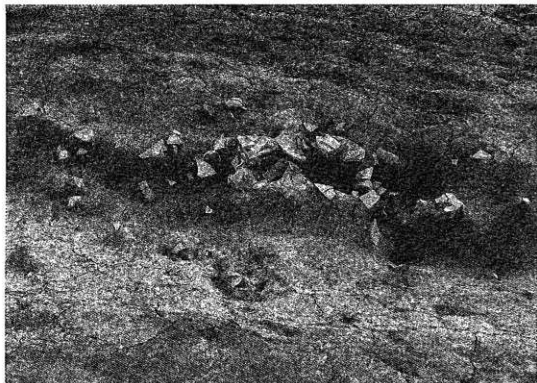
H 5 区 3 号溝状遺構遺物出土状況 (中層最下部)



H 5 区 3 号溝状遺構遺物出土状況 (中層最下部)



H 5 区 3 号溝状遺構遺物出土状況 (中層)



H 1 区 3 号溝状遺構遺物出土状況



H 1 区 3 号溝状遺構遺物出土状況



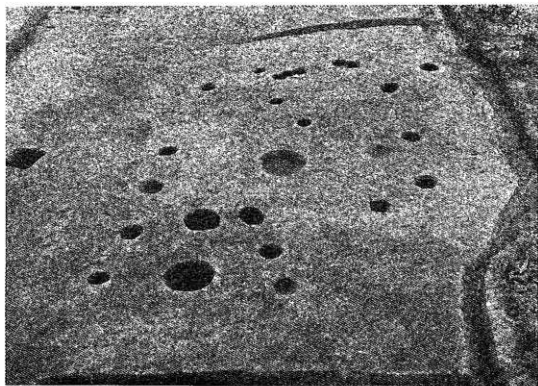
H 1 区 3 号溝状遺構と小穴群



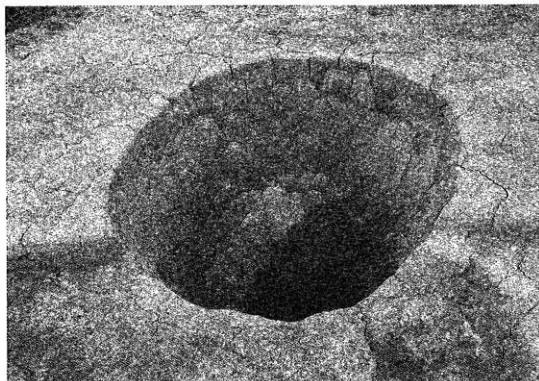
H 5 区鎌倉時代遺構群



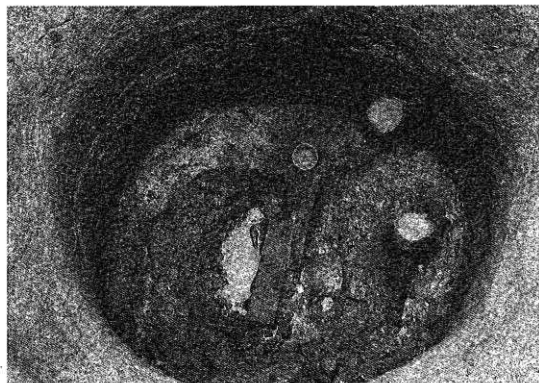
H 5 区鎌倉時代遺構群 (部分・南西側)



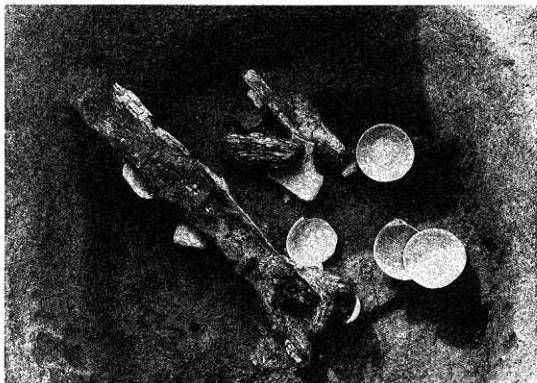
H 5 区鎌倉時代遺構群 (部分・北西側)



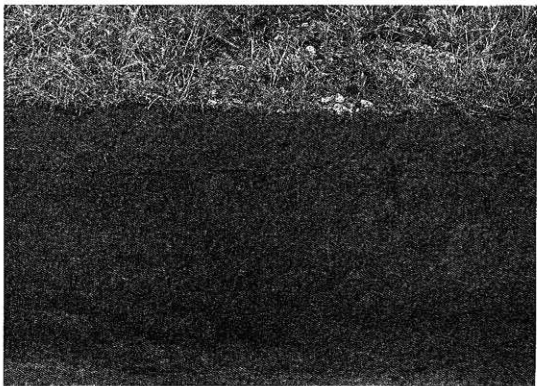
1号井戸状遺構完掘状況



2号井戸状遺構遺物出土状況



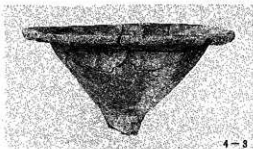
3号井戸状遺構遺物出土状況



B水路調査区E92付近断面



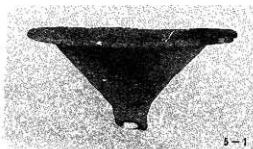
4-1



4-3



4-5



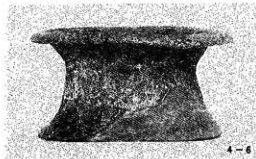
5-1



4-8



4-4

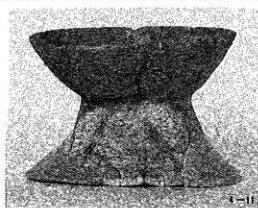
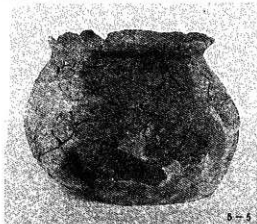
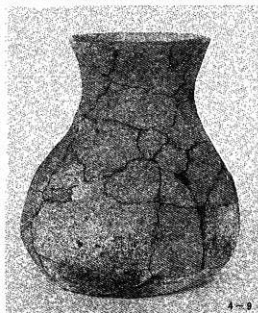


4-6



5-2

各地点出土弥生土器



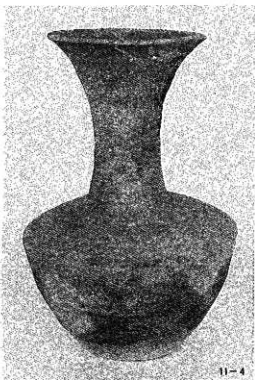
各地点出土弥生土器



10-1



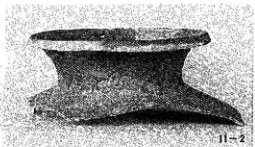
10-2



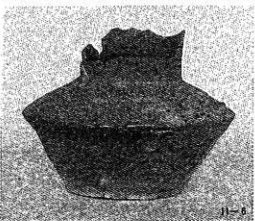
11-4



11-3

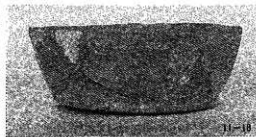
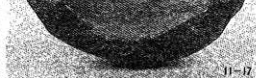
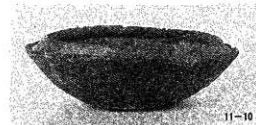
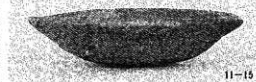
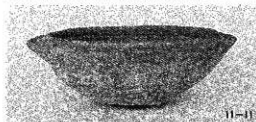
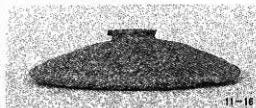
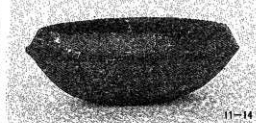
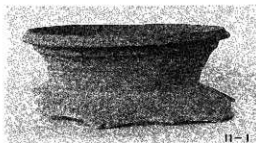


11-2

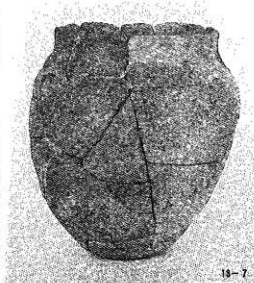
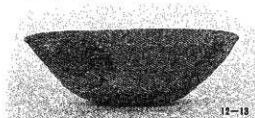
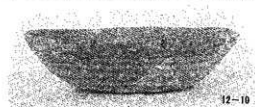
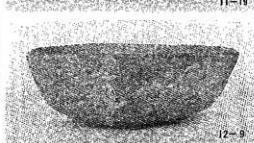
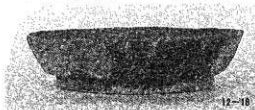
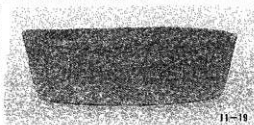
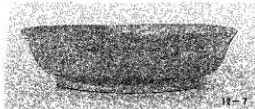
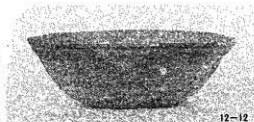
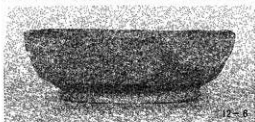
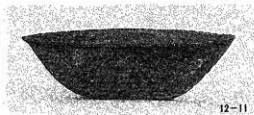
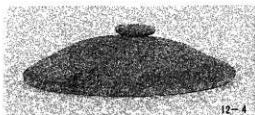


11-6

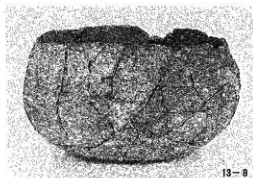
各地点出土須惠器



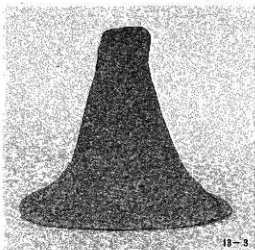
各地点出土須惠器



各地点出土須惠器・土師器



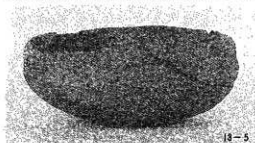
13-8



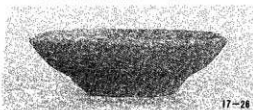
13-3



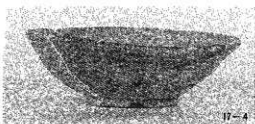
17-2



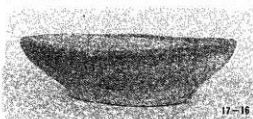
13-5



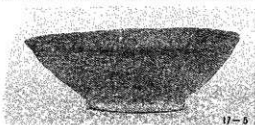
17-28



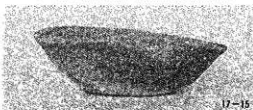
17-4



17-16



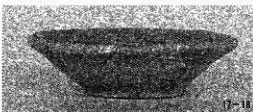
17-6



17-15

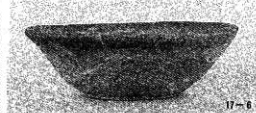
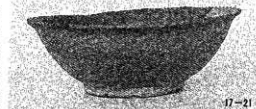
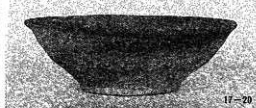
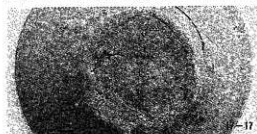
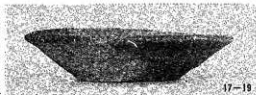
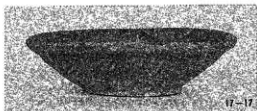


17-10

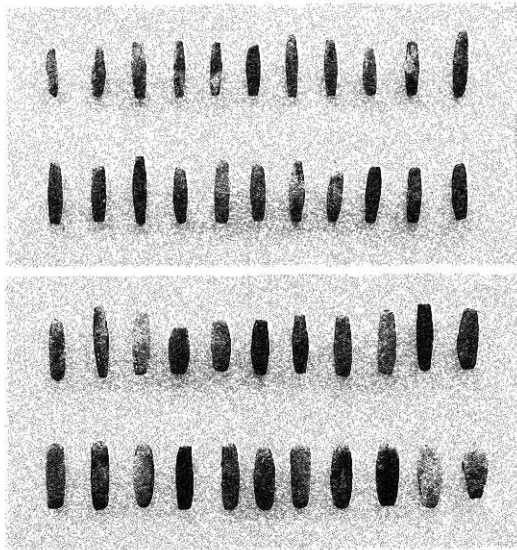
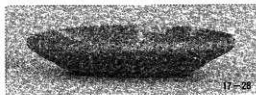
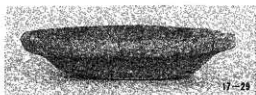


17-18

各地点出土土師器・陶器



各地点出土陶器



各地点出土陶器·土鍾

県宮ほ場整備事業浅羽地区内工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(1988年度分)

十二所遺跡

編集 静岡県磐田郡浅羽町教育委員会

発行 1989年3月20日

印刷 磐田市二之宮251
株式会社 山田印刷所